

最優秀賞

中学生部門〈言葉の力〉

八戸市立是川中学校2年

大矢 美咲

ゆっくり休んでね

とつてもとつてもつらかった。全部うまくいかなくて、どこかにいなくなってしまうた
いと思った。そんな私を助けたのはある言葉。

その日は朝から最悪だった。夜更かししたせいで寝坊して、母とは朝からけんかした。
挨拶もろくにしないで家を出た。学校で返ってきたテストは、今までで一番悪かった。
理科の時間はワークを忘れた。給食は嫌いなキノコがでた。重い気持ちで向かった部活動。
いつもはできることが何回やっても駄目だった。友達には八つ当たりをして、気まずくな
ってしまった。

どうしてこんなに嫌なことばかり起こるのだろう、悪い夢かもしれないと思った。でも、
叩いたほっぺは痛かった。自分の心の中は、罪悪感とか、悲しさや悔しさ、苦しさなど、
暗い感情でいっぱいだった。家に帰る道はいつもより長く、荷物は重く感じた。友達との
別れ際、いつもの「じゃあね」は口からでてこなかった。とにかく水でも浴びたかった。
手だけ振ると、友達は一言、

「ゆっくり休んでね」

とだけ言って家に帰っていった。そのとたん、私の目からは涙があふれ出していた。つら
く当たったはずの友達。それなのに私に優しい言葉をかけてくれた。そんなにも私は皆を
心配させ、迷惑をかけていたのかと思うと、自分はなんて小さい人間なのだろうと情けな
くなった。

その日はいつもより長めに湯船につかって、いつもより早くベッドに入った。今日の出
来事が頭をよぎったけれど、気づいたら朝になっていた。

久しぶりに一人で起きた朝は気持ちよかった。窓を開け朝の風を感じた瞬間、昨夜の
温かい言葉を思い出し、心が柔らかくなった。母のベッドの方で、目覚ましの音がした。
昨日は言えなかった、「ごめんね」と「行ってきます」が言えた。少しだけ軽くなったリュ
ックを背負って、私は、学校へと向かった。